

### 34 知的障害児施設における年齢別死亡率の新しい算出方法の提案

自立支援局秩父学園医務課 西野力男

10年誌の期間中に入所した園生145例全員の20年後から算出した年間死亡率は0.97%で、このうちSQが20以下の最重度知的障害の年間死亡率は1.43%で、重症心身障害の死亡率に匹敵するほどの高率であった。一方、20年誌の期間で入所した全園生77例の10年後での年間死亡率は0.39%で低く、対象者の最長年齢は前者では46歳、後者では35歳であった。このことは、加齢により死亡率が高くなることを裏付けているものと考えた。しかし、これを証明するためには、年齢別死亡率を検討する必要がある。そこで、創立から30年間の全園生の生存者数と死亡者数を、前者は最終集計日(S63年)の年齢、後者は死亡年齢として集計した。そして、集計期間が30年間であるという要素を加味して、生存者数は年齢群以上の累計数を、死亡者は正規の累計死亡数を算出した変則累計数により、死亡率を計算した(表1にSQ $\leq$ 20の集計数を例示した)。なおCONTROL群としては、30周年誌の年度に類するS60年の人口動態から、一般の年齢別死亡率と今回の変則累計死亡率の比較と、SQ $\leq$ 20とそれ以上の群に分け変則累計死亡率を検討した。

まず、CONTROL群において、一般年齢別死亡率と変則累積死亡率とは、相関係数0.98の相関関係を認めた(図1)。そして学園とCONTROLでの変則累計死亡率は、ほぼ平行直線を示し、SQ $\leq$ 20群では、それ以上の群よりも死亡率から見た老化は10年ほど、そしてCONTROL群よりも25歳ほど早まっていた(図2)。そして、SQ $\leq$ 20とそれ以下群での死亡率をKaplan Meier法で検討し、P<0.02で有意差を認めた。

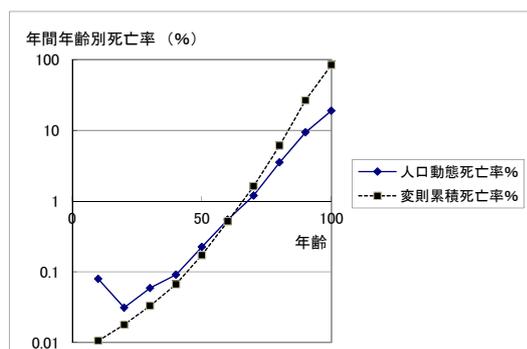
これらのことから、新たな算出法である変則累積死亡率は、年齢別死亡率として有用であると考えられた。

(表1 SQ $\leq$ 20群)

年齢階級	年齢	生存数	死亡数	累積生存	累積死亡	年間変則累積死亡率(%)
10>	10	1	1	123	1	0.03
10 $\leq$ <20	20	19	6	122	7	0.18
20 $\leq$ <30	30	50	9	103	16	0.45
30 $\leq$ <40	40	44	3	53	19	0.88
40 $\leq$ <50	50	9	2	6	21	2.59

矢印は累積していく方向を示す

(図1)



(図2)

